

ZEQU

表紙 / 龍炎狼牙



TS少女

精霊機士

せいれいきし

# ハルカ

第2話

試し読み版

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



TS少女  
精霊機士  
せいれいきし  
1000 第2話

ZEQU  
表紙 / 龍炎狼牙

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

いちのせはるき  
**一ノ瀬春樹**

TS病にかかり、女体化してしまっただ少年。男の身体に戻る手段を探そうとするのだが……!!



たりのまこと  
**十野真琴**

暗樹の幼馴染みの少女。暗樹よりも学年が一つ下で、彼を「お兄ちゃん」と呼んでいる。

ななやまあかね  
**七山茜**

一年前にTS病で女体化した春樹の先輩。クールでミステリアスな雰囲気をもっている。

## 第2話 折花攀柳の如く 女のコの生活

「う……うん……んん？」

窓から差し込む心地いい日差しの中、ベッドの上で日向ぼっこをしているネコのように丸まっていた春樹は、寝転がったままゴロリ……と寝返りを打つ。

「あ……朝か……っ!!？」

途端に、左右の二の腕の間、身体を横にした方の腕になだれ込んできた柔らかい感触に、思わず跳ね起きる。

そのまま視線を下ろし、春樹は固まってしまった。

見下ろした先にあるノースリーブの下着に包まれた大きな双丘。

「んんっ♪」

ソレを軽く揉むと、切ない声が上がってしまった。

「ゆ、夢じゃなかったのか……」

モミモミ……と胸の感触を確かめながら、昨日のことを思い出す。

自分がT S病を発病したこと。

どうやら、それが原因で、変な連中に襲われたこと。

そして……。

「あ……んんっ♪」

モミツと少し強く胸を揉むと、思考が止まるのと同時に、どうしようもなく切ない声が漏れて、あふれた。

「つて、何無心に自分の胸を揉んでるんだよっ！」

……確かに気持ちいいし、心地いい気分になるけど、自分は男だろ？ と自分で自分にツツコミをいれつつ、布団を叩く。

直後に感じたのは、ポヨンツとした心地よい弾力だった。

「んん……っ」

「……へ？」

直後に聞こえたくすぐったそうな声にまた、固まってしまった。

それでもギチギチ……ツと、油の切れた機械仕掛けのオモチャのように、視線を落とすて見る。

「んん……っ♪」

そこ、つまりは今の今まで春樹が眠っていたベットにもうひとり、春樹に胸を揉まれる形で女のコが眠っていた。

ホンノリ……と湿度を保った短い髪と長いまつ毛、ぷりっとした唇の隙間からは、静か



な寢息があふれている。

ソコから視線を首筋に下ろすと、なだらかな線を描いて肩に至り、控えめながらも形の良いオッパイへ、そして、ふつくらとしたお尻とムチツとした太もも、そして、キレイなくるぶしから、足先に至る。

「ゴクリ……」

ソレが元は男。今は同じ、女のコ。

つまりは、春樹と同じTS病に掛かった茜なのは分かる。

昨日、あの小男とバケモノに襲われた後、気を失ったままの彼女を、家まで連れてきたのも憶えている。

「わ、分かってるし、憶えているけど……」

「すくすくっ……」

しかし分かっていても、憶えていても、今の今まで同じベッドの上でしかも同衾どうきんしていったんだと考えると、首まで真っ赤になってしまった。

「しかし……茜先輩って美人だよな……」

TS病を発病して数ヶ月経つ茜は、柑橘系の甘酸っぱい香りをまとってすっかり女のころらしく、寝姿も可愛らしい。

なんとというか、ずっとこのまま見ていたい気持ちになってきてしまう。

「……んんっ」

と不意に、春樹がジロジロ見ていることを感じたのか、茜が小さく呻いた。

「茜先輩？」

「んくう……んんっ♪」

てつきり、起きたのかと思つて身を退いたが、違う。

見てみると茜のホッペは紅潮し、少し汗ばんでいた。

「はあ……はあはあ……」

その唇の隙間から、熱い吐息が漏れ出し、胸は激しく上下を始め、フトモモは気だるそうに組み直される。

「ね、熱でもあるのかな？ ああ、けど、それにしても……」

色っぽい。

さつきは美人だと思つたが、今はそれに加えて艶めかしく思えてきてしまう。

「はあはあ……んんっ」

「せ、先輩、大丈夫……ですか？」

気がつけば、そんなことを言いながら、春樹はまだ目を覚まさない茜に手を伸ばしていた。

……でもどこに？

普通に考えれば、額なのだが……。……。のだが。



「はあはあ……んくうんっ♪」

「ゴクリ……」

艶めかしい茜の姿を見ていたら、他の所に触れてみたくなってきてしまった。

そう、例えば、慎ましやかなオツパイや、薄布に包まれ、フトモモからキュツと奥まった股の間なんて……。

相手が寝ているのをいいことに、そんなやましい考えを持った春樹の手が、茜に伸びようとした瞬間、だった。

「春樹お兄ちゃん♪ おはようっ！ 朝ご飯、できたよっ！」

ガチャッ！ と元気よく春樹の背後のドアが開いて、制服姿の真琴が元気よく入ってきた。

「あ……」

「あ……」

瞬間、春樹と真琴の時間が、止まる。

「お、お兄ちゃん？ 何を？」

「あ……ああえつと、これは……その……」

色々悩んだあげく、茜の胸の谷間に手を伸ばそうとしていた春樹に、弁明の言葉など、あるはずがなかった。

「ごめん。どうやら少し熱があるみたいなんだ」

十数分後。

一ノ瀬家の隣りの十野家（たりの）から毎朝朝食を作りに来ていた真琴が用意した朝食を口に運びながら、茜はそう言った。

「昨日は色々と迷惑を掛けた……と、というか、キミ大丈夫かい？」

「ええ、まあ……」

茜の真つ正面、真琴の横で、ホッペに小さな手形をつけた春樹は小さく頷く。

「そんなことよりも先輩、昨日のアレ、一体何なんですか？」

話を逸らそうと口にした「アレ」とはもちろん、昨日の放課後自分たちを襲ってきたあの魔女のような小男と、バケモノのことだ。

「それに、茜先輩のアノ姿と……オレも……」

昨晩、春樹は真琴と一緒に居る所に、TS病で女のコになった自分を「商品」だという魔女のような小男とバケモノに襲われた直後に、現れた忍者装束のような格好の茜に助けられた。

常人離れした力と能力を持って茜は優勢を誇っていたが多量の触手の束と化した大男にスキを突かれ敗れ、犯された。

その直後に、彼女が持っていた謎の結晶の力で変身を果たした春樹は、茜以上の力を持つてバケモノを圧倒し、撃退した。

「結局、チビには逃げられたけど……けど、あの力……一体、何なんです？」

「そこまで聞いた混乱の色を隠せない春樹と真琴に、茜は箸を置く。

「まず最初に言っておかなきゃいけないのは、キミやボクが掛かったTS病は、病気なんかじゃないってことだね」

信じられないかもしれないけど、と一言付け加えてから、茜は言葉を続ける。

「簡単に言えば、呪い、それにボク等は掛かったんだ」

「どういことですか、それ？ の、呪い？」

昨日の一件以上に信じられない言葉に、聞き返した春樹にショートカットの少女は頷き返す。

「元々は連中は、この世界とは違うアルミシアサヴァルっていう世界の奴隷商団、ヴィランに属する魔導師で……。……。……。お願いだから、その可哀想なモノを見るような目はやめてくれないかな」

「ご、ごめんなさい」

「あ、すいません」

あまりに突拍子もない話に、何とも言えない表情になっていた春樹と真琴は同時に謝る。

「続けるよ？ ヤツ等はこの世界の人間、特に優秀な男子に目を付けて、ボク等みたいに女のコに変えて異世界にさらっているんだ」

「えっと、なんで、そんなこと……」

仮に、といえは茜に失礼だが、仮にソレが本当だとして、奴隷商団が男を女に変えてから人さらいをするのだろうか？

たださらうだけならば、女のコをそのままさらった方が効率がいいに決まっている。

「うん……そのことなんだけど、十野さん？」

「え？ あ、はい？」

「悪いけど、コーヒーのオカワリをもらえるかな？」

当然出てきた春樹の質問に、茜は目配りしてから、真琴にそう頼む。

そしてパタパタ……と台所に急ぐ真琴の気配が遠のくを待ってから、茜の口から漏れたのは、ため息だった。

「はあ……時に、一ノ瀬くん、キミは昨今の女子の風紀についてどう思う？」

「……はい？」

「だから、何て言ったらいいんだか……。生徒会長の立場から言わせてもらってもいいんだけど、最近の女子の貞操観念だよ」

「……は？」

先ほど以上に、言葉にしがたい顔になってしまった春樹に対し、もう一度ため息をこぼした生徒会長が言うには、こうだ。

異世界アルミシアサヴァルの奴隷商団ヴィラン。

元々は、アルミシアサヴァルの奴隷や、エルフの少女を、商品として扱っていたが、近年、この世界の住人にも目を付け始めた、らしい。

この世界の住人、特に先進国の人間は、よく教養されていて美しく発育もよくて、奴隷としての質も高く、高額で取引されている。らしい。

しかし、昨今の性意識の荒廃で、普通の女が処女であることが少なく、商品価値が下がるため、ヴィランは、頭を悩ましていた。……らしい。

「……まさか。それで、オレたち成績優秀な男子を女のコにして……?」

すでに、らしいの連発で頭が痛くなってきた春樹の質問に、茜はコクリというよりも、ガクリと頷く。

「どうやら、そのようなんだ。TS病……いや、呪いを掛けて女のコにしたボクたちみたいなのをさらって、アッチの世界で性奴隷にするとかで……呪いを掛けて、女の子にしてスグなら、当然処女だし……」

「はあ……」

スケールがデカイのか、みみっちいのか、よく分からない話だ。

自問しつつ、手近にあった休憩用のベンチに腰掛ける。

「ふきゅんっ♪」

直後に、その唇の隙間から、何とも甘い声が上がった。

「な、何？」

自分でもビックリするようなその声に、ショートカットの少女は自分の肩を抱き締めるようにして、恐る恐るベンチに座り直す。

すると今度は、柔らかいお尻がベンチに広がるジワリッ……とした感触と共に、股間から脳天まで何か太い杭に打ち抜かれるような快感が茜を貫いた。

「ふきゅんっ!!」

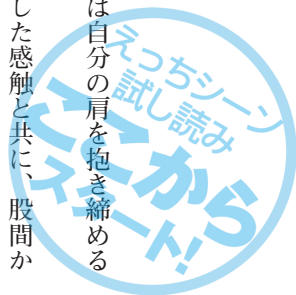
耐えられずに、もう一度あふれ出そうになった声を、血が出るほど唇を噛みしめて、抑え込む。

「ふくう……。うう……。うっ……。ゆっ……。うっ、うっ!!」

たったソレだけの行動だというのに、熟したトマトのフチを噛むような唇に食い込む歯の感触に、ゾクゾク……と来てしまう。

同時に、先ほどから内股の奥で疼く熱が、一気に広がる。

その熱は、そのままその奥にまで広がって徐々に拡散されるが、その後にくつろきを持った疼きは、中々治まらない。



「はあはあ……へ、変だ……ボク、変になって……る？」

その理由が思いつかず茜は、誰ともなしに助けを求めるように、視線を上げる。

当然、視界の中には、春樹も真琴もない……が。ふとそんな彼女の目の前をサラリーマンが通りかかった。

途端に、かつ意識もしていないのに、茜の視線がその股間に釘付けになり、引っぱられてしまう。

ドキドキが高まり、治まらない。

「えっ？ あっ?! うっ？ な、何？ 今の？」

今、小太りしたクサそうな中年サラリーマンのドコを目で追った？

「ど、どこって……？」

反射的に浮かんだ思考に応えようとした瞬間また、股間が疼く。そうこうしている間にも数人の男が、その前を通りかかる。

年齢も職業も、外観すら関係なく茜は、その股間を凝視してしまう。

「へ……変だ。ボク……変になつて……うかう」

意識の底に広がる本能が、強制的にソレを欲しがっている。と、実感する。

「ふ、ふぎけないで……。ボクは別にそんなモノ……なんて、オチンチンなんて……欲しくない……ふかううっ！」



その名前が唇から滑り落ちた瞬間また、股間が疼いてきてしまう。

「な……にコレ？ アソコが疼いて……？ キュンキュントゥ ってしてる？」

ついには座つてられなくなり、ヨロヨロ……と立ち上がる。あげく、前傾する体重に引っぱられ。いや、導かれるように茜は歩き出し始めた。

そして……。

「はあ……はあ……うきゅ……んんっ！」

そして、フラつく足取りのまま茜がなだれ込んだのは、女子トイレだった。

「はあ……はあう……はうはあはあ……ココなら……」

ココなら、大丈夫。と思うと、ズクンッ！ と心音が高鳴り、洋式便所の中ブタの上で思わず前のめりになってしまう。

「んんっ！ んん……ふう……くう……ボ、ボク、どうなってるんだ？」

今この瞬間、自分が感じている違和感の正体が分からず。

それでも勢いよく、スカートのホックを外して、ズリ下げた瞬間だった。

「な、何コレ？」

穿いていた水色のパンティーがグッシヨリ……と、布地が紺色になるくらい濡れている。

「な、なんで？ こんな……？ オモラシなんてしてもいけないのに？」

理解が届かず、それでも自然と、その細い指先は、濡れそぼったパンティーに伸びてし

まう。

「はうっ♪」

そしてクチュツ、という水音を立ててパンティーに指が食い込んだ途端、茜の口からは、押し出されたような声が漏れた。

「んんっ？ な、何コレ？ 今、ピリッ……つてきた？」

ピクンッ！ と身体はおろか思考まで揺らすような快感に、思わず手を引いてしまう。しかし、それもほんの数秒だった。

「お、女のコつて、こ……こういうモノなの？」

数秒後には、その指はまたパンティーへ……いや、その薄布が食い込んだフニツとした腰に向かう。

そのままクチャリ……ッ、という音を立て、間からパンティーが糸を引きながら剥がれるのを感じつつ、なだらかなお尻のカーブにそって降ろす。

露わになった股間は、プニツ、という膨らみはまるで、透明な飴細工でも塗りたくったように、ツヤツヤと輝いていた。

「ココ……昨日犯されて……なのに……お、女のコつて、アソコ……ココ、犯されたら、こんなになっちゃうの？」

今の彼女の反応と言動を見れば、そういう経験をしたことは昨日までなかったことは

おろか、自分でも弄ったこともないのは、明白だった。

「な、なんで、こんな濡れて……？　今まで、こんなこと……アノ日にもなかったのに？」  
頭脳明晰な生徒会長といえど、女のコの身体には明るくないのだろう。

「は、早く、一ノ瀬くんたちの所に戻らないといけないのに……っ」

何故、こんなことになっているのか分からず。それでも、どうにかしようと、トイレトペーパーを引きちぎり、秘唇を拭う。

「くきゅうんんっ」

直後に、女子トイレの個室の外まで響くような声を、茜は上げてしまった。

「ふひっ！　んっ！　んんっ！　んん、んんっ!!」

安物のトイレトペーパーのザラリ……ッとした感触が秘唇にこすれ、そのまま飛び上がるような快感に変わったのだ。

「ひ、ほっ？　んん……何？　何今の？　何？」

先ほど感じた電気のような刺激が、何十倍にもなって、脳と思考をかき乱す。

「変……変だよ？　ボクのココ、変になってる。ちよつと……触っただけなのに、擦っただけなのに……っ」

それだけなのに、気持ちいい。

「それに……この感じ……嫌じゃ……ない……？」

その痛みとは対極にある、切なくてトロけそうになる感触。

甘い毒。……そんな言葉が茜の脳裏によぎる。いや、突きささる。

「はあはあ……こ、こんなこと、しちゃイケナイのに……お、女の子の快感に、流されちゃいけない……のに……んん、んっ！」

春樹にも言った忠告を思い出し、自分を制しようとする。

しかし、茜の手は言葉とは裏腹に止まろうとしてくれない。

「ダ、ダメエ……」

ココは自宅でも何でもなく、ショッピングモールの一角にある女子トイレだとも、理解している。

「け……けど、こんな……こんなに濡れてるんだから……」

だから何とかしなければ、と思うのは、ただのイイワケだとも分かっている。

けど、故に、止まらない。いや、さらに興奮してきてしまう。

「こんな所で、こんな声……はひゅん♪ 声を出したら、バレちゃうのに……」

止まらない。

「もつと……もつと、ココ……ココを弄つたら？」

言いながら、プルプル……と震える白い指先で秘唇の上部、プクウツと痛いほど膨らんだ部分……クリトリスに触れてみる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**